申付けられている）。これが、甲府測候所が独自で予報を出した最初ではないかと思われる。

霜の予報に関しては、同じ年の四月十三日に「甲府測候所東原技手は降霜予知管内雨量観測雨量計の構造等調査の為め中央気象台へ出張中の所一昨日帰県せり」との記事が見られ、続いて「四月十四日午後七時甲府測候所は（降霜あるべし）との警報を発した」となっている。

天気予報と降霜予報は時を同じくして始められたようである。この降霜警報の伝達方法はというと、残念ながら資料は見あたらず、ただ新聞から降霜のおそれのある時は、測候所が県庁その他の役所へ打電通報し、それを受け愛宕山頂などで号砲を発射し、また釣鐘・半鐘などを打ちならして、情報を伝えていたことがわかるだけである。

警察について

当時、甲府警察署管内には、場所等はっきりしないが七つの駐在所と数か所の派出所があったようである。明治二十二年に出された巡査注意報告心得の中で、巡査が注意をすべき事項の一つに「農蚕業ノ豊凶乃殖産上ノ盛衰ニ関スル事」が挙げられている。これによると、警察官が養蚕について注意を払い、農民の利便を図ることは、任務の一つということになる。

警察電話についてであるが、明治三十六年県警察部警務課に電話主任及び工夫三名を置き設置作業を始め、明治三十七年着工した。この年に完成したのは、県庁―猿橋署―上野原署、県庁―谷村署―吉田署、県庁―石和署―日下部署の三線であった。本市に関していえば、この翌年県庁―甲府署、甲府署―停車場巡査派出所の二線が架設された。

現在とは違い、電話線が通ることは村の文化発展であるとして、地元村落はきわめて協力的で、電話も地元有志の寄付によるものが多く、用地もほとんど無償で提供をうけたという。地元の人達の喜び・期待が伝わってくるが、そこから先の資料は得られなかった。

以上、私の調べたこと、感想などを述べさせていただきました。結局、私が当初興味を持ったことについて、確証できる資料を得ることはできませんでした。けれども、一つの事柄には、その基になる様々な事柄があり、見ることのできる頂上は狭くても裾野は広く続いているのだということを実感し、歴史の奥の深さ、楽しさを改めて感じることができました。

（市職員＝投稿＝）

食糧増産の鬼瓦

樋口光治

私の家に残る鬼瓦は戦時下食糧増産運動の際、野口二郎市長が市内農家の増産努力に報いる感謝の印として二〇軒足らずの篤農家に配ったものの一つである。この春「山梨日日新聞」紙上で鬼瓦の所持者捜しを呼びかけたところ、一四名の方々から所

持されている旨の申し出があり嬉しく感じた次第である。

あれは確か昭和十八年五月頃のことだったと記憶するが、早朝、市の農業会専務理事であった私は京島幸男農政課長とともに野口市長に呼ばれて市長宅を訪れた。話しの内容は昭和十八年度の甲府市の蚕、大(小)麦、米などの供出割当の消化のことで、どう対処するか農家の実情を思うと昨晩は眠れなかったと市長は言った。日米開戦より一年半余り、労働力不足、資材の不足はますますひどくなるばかり。非農家が大半を占める甲府市民の食生活も惨めなものになりつつあった。市では雑草をつかった料理講習会を開催し、或るときなどは講師の先生が「蠅(はえ)の佃煮」を作ったので大変驚いたことがある。その朝のことだったか、市長の家でかよ夫人が出してくれた朝食も、皿に小さな一五センチばかりのサツマ芋が一本きりだった。食糧不足の深刻になりつつある状況に鑑み、増産はどうしても達成しなくてはならない、そういうことであった。

しかし農家の方でも、すでに働きざかりの男たちは応召や徴用でムラを後にし、残っているのは四〇才以上の男と女・子供ばかりで、労働力不足と資材不足を補うには大変な努力が必要だった。肥料の不足に対処するために重労働の堆肥づくりに精を出し、田植のときは女衆が腿までドロ田につかって馬耕をした。従来男のする仕事も女がしなくてはならず、主婦の労働軽減のため託児所や、一〇軒から一二軒で組になっての共同炊事が農繁期のあいだずっと続けられ、非農家の婦人や女学生が来て手伝った。年寄りも寒風の吹きすさぶ田圃でみのる式足踏脱穀機をゴッキンゴッキンと踏んで働いていた。子供たちも学校から帰るとすぐに家の手伝いをしなくてはならなかった。市内の都市生活者も増産救援隊を組織し、農家で組織された食糧増産報国隊と一緒になって農作業を手伝った。老若男女を問わず「お国のために滅私奉公」させられたわけである。

こうした労働力不足と資材不足をカバーする重労働により昭和十八年の秋は供出割当を消化することができた。「よくやってくれた。農家の苦労を感じて涙の出るようだ」と野口市長は言い、その苦労と努力に報い感謝の気持ちを表わしたい、ということで色々考えた末、特製の鬼瓦を職人に焼かせて贈った。一片の表彰状では、市民に国家からの至上命令を伝え上意下達で動かす責任を一身に負っていた市長として野口の気がすまなかったのだろう。そういう人柄の市長であった。

戦時下の無い無い尽しのなかで農業生産を持ちこたえる人々の汗と奮闘とを鬼瓦は物語っているように私には思える。翻って現在の飽食の時代に日本農業の置かれている非常に困難な状況を思うにつけ、あの時の困難に立ち向った農民のエネルギーを思う。あの時は戦争中であり、食糧は貴重であり農業はもっとも重要な産業であった。戦争のために飢え、重労働をしなくてはならない時代など二度と御免であるが、しかし私は昭和十八年の鬼瓦を見るたびに「あの農民のエネルギーを復活して日本農業を復興させよ!」と願わずにはいられないのである。

宮沢清氏所蔵の鬼瓦

(市史編さん調査協力員)